

都市環境の倫理と美学

漆原美代子*

The Ethics and Aesthetics of Urban Environment : Streets as Communication Stage

Miyoko URUSHIHARA*

* エッセイスト(都市論、美術評論) Essay ist, Art critic, Adviser of Urban Scenery 原稿受理 2004年9月17日
鹿島建設設計部嘱託、多摩美大非常勤講師などを経て、国交省、大蔵省他の審議会委員を務める。著書『都市環境の美学』、
翻訳書「インテリア アーキテクチャー/環境構成の基礎」など多数。古代ローマの公共精神は、時代と国境を越える普
遍的理念と呼び覚ます。現代社会のメカニズムを把握し、美しい都市景観の形成に不可欠なこうしたモラルの共有について、
グローバルな視野から一人でも多くの人々との相互理解を高めるレトリックの洗練も大切な課題と考えている。

はじめに

「大地はすべての人のもの」というホメロス(BC8)の詩ではじまる、ギリシャの哲学者アリストティデス(BC2)の一文を、塩野氏は、ローマ街道の敷石の写真をバックに引用している。「ローマは、この詩人の夢を、現実にしたのである(中略)」そして、卓越したインフラ政策の遂行によって、「すべての人に秩序ある安定した社会に生きる重要さを教えたのであった」と。

このギリシャの叙事詩人ホメロスの詩は、現代社会が、今まさに、おそらく危機的な状況の中で、改めて、最も必要とされる意識の覚醒をうながしているかのようである。

本稿では、広義の「都市環境の美」をとりあげる。主要なインフラの実例としては、道路、あるいは市民生活の舞台となる街路とその周辺環境にしばり、一貫して社会資本整備の理念を抽出する内容とする。

都市と美的形成 異なる要素の関係

まず、都市とは、どのような社会であれ、多様に異なる要素(自然、道路、広場、建築、橋etc.)の関連性の上に創りあげられている。そして、景観美とは、そうした諸々の要素が、互いに補い、あるいは高めあう「関係」を得るような美意識と道徳観により、固有の一体性を獲得することで生まれるものである。

つまり、都市環境の美は、私的な趣味、欲望、満足、因襲などの範疇の集合体では達成されない。景観美とは、例えば「公的な空間」と「私的な空間」、

あるいは「個(自分)」と「他者」、「部分」と「全体」等、一見異なる要素や領域の接点で、「美的統一性」「社会性」「公共的倫理観」によって考え、選択する、いわば成熟した「調整」の結果である。

古代ローマは、国全体を一家族(Familia)ととらえ、最大多数の最大幸福を願う「公共の福祉」を精神基盤とし、都市的様式美を導いたと言えるであろう。塩野氏は、ローマ人のこの生き方を「運命共同体」という言葉で説明している。

そこで、日本の国土利用のソフトとなる法整備を考えると、古来、中国伝来の「一家族中心主義」の系譜を今日まで引きついでいる特徴が見えてくる(石井紫郎『法制史』)。古代ローマの国全体を「一家族」と意識した生き方と異なり、「一家族中心」の生き方は、エゴイスティックな「所有権絶対主義」等の習慣を醸成。戦後の農地解放後は、都市化のプロセスで重要課題として調整すべきであった「地域風土に合うデザインの統一性」といった基礎的な国土利用の倫理と美学を軽視する素因となったかもしれない。

社交空間としての街路

さて、古代ローマ固有のインフラは、自然石材など、素材の「特質＝制約」とアーチ技術の「特質＝制約」との、見事な結合によって建立されたと言える。巨大なアーチ橋、円蓋、凱旋門etc.は、すべて、自然環境と歴史のコンテキストが、古代ローマの建築家たちの意図に「抑制」の力として働き、一大芸術空間を編成する各要素となりえたのであろう。近現代の諸都市(もちろん東京も含む)でも、この都市

創造の力学は変わらない。今日の日本の市街化された地域のように、自然環境や伝統的連続性の希薄なところでは、新しい建築群の統一性への明確な美意識と平行し、後述するように、それぞれの土地にあった緑や水のネットワークといった計画性が機能的かつ美的要件ともなる。

ローマ時代、もし鋼鉄の技術が既に解決されていたら、皇帝の趣味などにより、巨大さを競う橋や建築の少なからずが、自然素材だけでなく、鋼構造との折衷になっていたかもしれない。その結果、ローマの様式美は、破調をまめがれなかったかもしれない。という塩野氏の想像には、無視できないリアリティがあると私も思う。

「折衷主義」は、本来、その場所性、大小にかかわらず、きびしい「節度の美学」を課すからである。

インフラの理念を先導したローマ街道も、石材の特質を活かし、内部構造と精密に組まれた表面の敷石、それにメンテナンスの徹底によって、都市基盤のシンボルとなり世界史に名をとどめている。

ローマ街道の、現代社会につながる普遍的選択の一つ。それは、市外の街道にも、市内の街路と同じように、歩車道の区別を取り入れたことであろう。古代の歩車道分離は、馬の駆ける主道路の機能完遂のためであったとしても、結果は、高速用道路と歩道という「異なる交通の利用者双方」にとって使いやすく、安全、かつ美しい道路環境となった。

敷石舗装された街道のすぐ脇は、防衛と路面のメンテナンスのために、植樹が禁止され、距離をとった緑の繁りは風景を造成したが、歩道を散策する人々に緑陰の恩恵は得られなかった。それでも、両脇に広がる芝草のオープンスペースには、多彩な石造建造物が並び、ローマ人の心身に快適でビジュアルな喜びをも与えたにちがいない。そして、ローマ街道周辺は、魅力的な「社交空間」でありえたであろう。

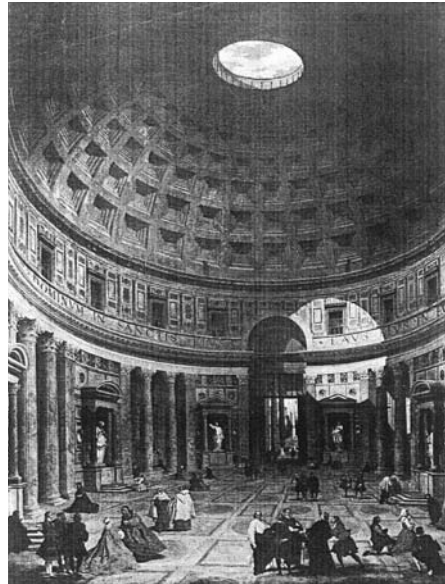
街路、街並みの「美」を守るために、今日に至る西欧の諸都市は、トスカナ地方の城郭都市での新旧要素の折衷の工夫であれ、都心の街路や地中海沿岸の新しいリゾートの景観であれ、それぞれの地域特性を活かしながら「統一性の中の変化」という節度ある美的ルールを細部に至るまで、貫徹させている。

城郭都市ルカは、広場中心に建つ教会に描かれたフレスコ画の青紫系の淡いグレーをもとに、新しいオーイングから、公共バスの車体の色までを「統一=制限」している。そうした街全体に流れる秩序が、

平和な社会であれば、好ましい舞台装置の雰囲気を持ち、登場人物に都雅な拳手動作や会話を誘う社交的都市空間になりうるといっても過言ではないであろう。

芸術空間と効率空間

ローマ帝国以来の強国アメリカは、若い国を自他共に認めるが、その源流に遡ると、やはり「古代ローマの道」に通ずるといえようか。16世紀のアメリカ、植民地時代の為政者は、街の美的規制を重視して、条項に取り入れている。「植民者は町の美観のためすべての構築物を整合すべく努力すべし」と。美的調整を含む公共福祉の概念は、今日に至る都市政策の基幹をなしている。アメリカで、私たちが今訪れて目にする中産階級の集合住宅街や郊外住宅地の風景の背後に読み取れるのも、「私的領域」と「公的領域」のエレガントな関係と言える。各住宅の、芝草や低木、花々の、よく手入れされた前庭は、街



古代ローマのインフラ、都市環境の特質の一つは、外部秩序と内部秩序の美的な相互換入の様式美にもあった。光源は円蓋中央の円形窓(直径9m)のみで、太陽を象徴。その象徴どおり、「宇宙の光源」に従って壁面を時間の経過とともに「動く光の円」が巡る。諸々の神をまつる神殿内部もドラマチックな広場的社交空間であったことをしのばせる。「雄大なしかも洗練されたこの地の物象を前にしては、太陽や月もちょうど人間の精神と同じように、他の場所とは違った作用をするようになるのだ」(ゲーテ『イタリア紀行』相良宇峯訳、岩波文庫より)

図版出典) Materials and Methods: The Roman architectural revolution . 115 , Smith Women 's Colledge , Library.

Fig. 1 「パンテオン」の室内

路樹の天蓋の下、個人の庭というより、「外部の街路空間の一部」になっている。「私」と「公」の間の美意識、理念において、イタリアもアメリカも同じであり、異なるのは形式である。

さて、ルネッサンス都市フィレンツェ。あの優雅な街並みは、緑の濃淡を刻む山々と川の流れに抱かれて、みな同じような濃さの白壁と赤茶煉瓦の傾斜屋根をもって広がる。その全体にそびえたつ大小二つのローマ式円蓋が、さらに絵画的な変化を添えているが、円蓋の屋根の色は、都市全体の屋根屋根と調和させている。

一瞬、フィレンツェは、私に江戸時代の京都を想起させた。江戸時代の日本の古都も、家々の背丈や自然な色使いの統一、五重の塔などの変化に至るまでフィレンツェに似ており、都市の様式美を分かちもっていた。まだ電柱や架空電線も、京都の風景に乱入していなかった時代の面影ではある。明治維新以降、日本の都市が、「効率空間」に向かった経歴は、西欧の諸都市の生き方が「芸術空間」をめざしたのと、実に対照的ではあった。

今日の京都には、世界に誇りうる伝統的な庭園や寺社がなお点在している。しかしそれらを結ぶ街並みは、ほとんど歴史観を失っているだけではない。20世紀後半に造成された日本のどこの市街地とも変わらぬ雑然とした風景で埋められてきている。文化都市をつくるのは、世界遺産や特別保護区だけではないのである。「これがパリやヴェネツィアなら、

旅行者は文化遺産だけが目的で街を無視することはない。ルーヴル美術館だけを観にパリを訪ねたり、サンマルコ大聖堂のためだけにベネツィアに出かける人がいるだろうか」（アレックス・カー『美術評論』）。

欧米はもちろん、90年代以降、近代建築の増えたクワラルンプルやバンコック等でも「視覚公害」とみなされ、排除される要素が、何故、日本だけで温存されているのであろう。電柱、電線、ビル外壁の看板、垂れ幕、自動販売機、といった多彩な日本の効率と商業主義的デザインは、道路交通上も危険な要素。屋上の冷暖房装置、貯水槽や電気機械類の箱etc。こうした屋上のがらくたは、本来、建物の内部に収められるか、目立たぬ工夫がされるものである。それらが、容積率規制や他の法律によって調整されるどころか、促進させたことの検討は考えたい。

街路の風景を大切にす都市型美意識が世界の潮流である中で、日本が、「都市環境の美しさは個人の趣味」といった因習的な錯覚を持ち、「私有権絶対主義」の生活観にしばられている限り、国民全体の幸福が阻害されていることに気づかなければならない。「わが国では、道路と内部空間との浸透を遮断する塀によって無表情な街並みを形成している。このような構成では前面の街路に対して無関心となり、街並みを美化しようなどという意識は決して湧いてこないと考えられるのである」（芦原義信『建



古代ローマが培ったPublic Spiritは、アメリカの郊外住宅街や公園では、しばしばイギリス式田園風景の影響のもとで開花。多様な交通網を見、体験するのも愉しみであるほど、見事に設計されている。多種多様な樹木、花々。19世紀折衷式デザインのいくつもの橋による装飾的立体交差の方式を含み、一部アスファルト舗装だが、散策、ジョギング、犬や馬のための土の道。かわいらしい草花のカラフルな道などなど。実に豊富な「都市環境の良心」によって編成されている。

Fig. 2 ニューヨークのセントラルパーク

築学』)。

確かに20世紀後半に市街化された日本の生活環境には、都市と農村を問わず、無機質で単調なアスファルト舗装とコンクリートブロックの塀で囲まれた街路が増え続けている。

公共精神が支える自然環境

20世紀の巨匠と呼ばれるコルビジエ(1887~1965)は、「ヨーロッパでも、古い街並みは、自然の緑がなくても美しいが、近代建築には緑を欠かせない」と、日本の現状に対しての特別な見識と示唆を含むような言葉を残している。

先に引用した「日本の塀」は、結局、外部秩序における文化的軽薄さを増幅させたと言わねばならない。例えば、東京の魅力的な公共空間でもある有名な公園、新宿御苑や小石川植物園などの豊かな緑も、「塀=公的街路との境界線」で囲われている。そこで、公園内部の緑を、街路の美的要素として「共有」しようとする思想こそ、土地面積の獲得の問題等を越え、環境の美化、快適さに寄与する美德となるはずである。こうした公共精神の覚醒が、政策担当者や市民の視野の拡大につながるとも考えられるのである。

自動車交通時代の今日、世界の代表的な都市の街路を体験しても、街路樹による緑の天蓋をもつところ、それも複数の並木道が計画されたところは、人々の集い憩う愉しさ、気品と美しさを増幅させているのを感じることができる。近年、並木道を増やしたパリのシャンゼリゼは、さらに洗練された「社交空間としての街路」のわかりやすい例である。

東京の明治神宮外苑の森は、都市的資産。あそこのいちょう並木通りに隣接する表参道も、それぞれ趣向を凝らしたあるレベル以上の建築群が、ケヤキの並木とエレガントに溶け合っていて続き ビジュアルにもほどよい人間的スケールで、通り抜ける喜びを感じさせる街路の一つになっている。しかし、ここで劇的に自然の緑や水を生かす街路空間の再生を考えるには、短期間で「庭園都市」を計画したシンガポールの「樹木の扱い方」から学ぶことは少なくないであろう。

今日でも、防災都市計画などの観点が説得力をも

つが、美の観点を併合して、はじめて、公私にわたるバランスもとれる。恐怖からもあるが、環境の美を整える喜びに基づく、産業に力を入れる姿勢と教育が大切であろう。

こうして、都市での樹木などを巡る現実的かつ美的な環境の整合性を求める時。その先に、私は、いつもニューヨークのセントラルパーク(1858~)で成熟した自然の芸術的包容力といったものに到達する。この大自然公園に託した立案者の夢「貧しい人々にも、富める人々にも、等しく民主的に、美しい土地を共有し、自由にたのしむことができるオープンスペースを」という理念には、ギリシャの詩人ホメロスの大地への想いが重なってくる(Fig.2)。

おわりに

私権絶対主義の現代日本の社会では、「私的領域における個人の自由」と、「公共領域における公共の秩序」この両者の関係に対して極端なほど無関心であるように見える。

そのような状態は、世界のどの時代、どの国にあっても、人心の荒廃、道徳的退廃、環境のゆがみを生むことに気づかねばならない。

「公」と「私」の関係に限っても、実際には、「公と私の領域について話す際には、それらを一つの分子として考えなければならない」(リチャード・セネット『都市論』)。互いに相手を正すものであるからである。

これからの私たちの目標は、地球資源の知識をできるだけ正確に学び、大地、自然との関係を正常に保つバランス感覚を調節することでもあろう。公正な心の基盤に立って世界の美的秩序に貢献しうる「環境立国」を目指すことはできる。そのためにも、文化全体にわたる価値基準として「節度ある美しい統一性」、とりわけエリートの「公共精神」は、社会資本整備において、重要な知覚を支えるものとなるであろう。

古代ローマの物語は、はからずも、そうした「人間活動の道」に立ち帰ることの意味を現代社会を生きる私たちに気づかせてくれたのではなからうか。